

見えない・見えにくい方々の理解と支援

みなさんは「見えにくさ」と聞いて、どのような状態を想像するでしょうか。

視覚障害にあまり関わったことがないと、近視や遠視、または老眼を思い浮かべるかもしれません。しかし、そのような場合は眼鏡やコンタクトをつけると明瞭に見えるようになります。それらは視覚障害ではありません。

視覚障害の「見えにくさ」は一人一人それぞれ違います。また、その見えにくさを周囲の人に伝えるのは難しいものがあります。ここではその「見えにくさ」についてお伝えしたいと思います。

1 視覚障害とは

視機能の永続的低下の総称です。

現状以上の視力回復が難しい状態であり、視力・視野・色覚・暗順応・眼球運動等の機能が低下した状態です。

学校で授業を受けたり集団で活動したりする際に問題になるのは、視力障害、視野障害、暗順応・明順応障害等です。

2 全盲と弱視

教育的分野ではその見え方によって、障害の状態は次の二つに大きく分けられます。

(1) 全盲

点字を常用し、主として聴覚や触覚を活用した学習を行う必要のあるもの

(2) 弱視

視力が0.3未満の者のうち、通常の文字（活字・墨字）を活用するなど、主として視覚による学習が可能なもの

3 視覚障害の主な特徴

次の写真を見てください



視覚障害のない人が、この部屋の入り口に立てば、部屋の広さ、机の数、配置、椅子の数、配置、人がいるか等の情報を一瞬で入手できます。

視覚からの情報は全体の80%以上と言われます。

見えるとは”瞬時に全体を把握できる”ことであると言えます。

視覚障害があると、その情報が入らない、または、入りにくいということになります。

(1) 全盲の特徴として次のようなことがあります。

- ① 視覚を使用して情報が得られない
- ② 全体像の把握が難しい
- ③ 視覚以外の感覚を用い、外界の情報を得る

(2) 弱視の特徴として、次のようなことがあります。

- ① 細かい部分が分からない、分かりにくい
- ② 大きな物の全体把握が難しい
- ③ 全体と部分を同時に把握することが難しい
- ④ 境界線がはっきりしない
- ⑤ 立体感に欠ける
- ⑥ 動いている物がよく見えない
- ⑦ 遠くの物がよく見えない
- ⑧ 知覚の速度が遅い
- ⑨ 目と手の協応動作が難しい など

4 弱視の見え方・見えにくさ

弱視の人は視覚からの情報が全くないわけではありませんが、視覚障害のない人のようにははっきりと見えてはいません。その見え方は様々で一人一人違います。また、本人にしか分からない見えにくさもあり、それを理解するのは難しいことです。

以下に代表的な見えにくさについて説明しますが、必ず見えるというわけではなく、弱視の見えにくさを理解するための一つのイメージということを御理解ください。

通常の見え方



(1) 「ピンぼけ状態」・・・ぼやけて見える等解像度が低い状態

<見え方>

- ・ ピントが合っていない状態
- ・ 図と背景の境界線が不明瞭
- ・ 細かい部分を見分けにくい

<主な疾患>

- ・ 近視や遠視などの屈折異常

<見えにくさを改善するための方法>

- ・ 眼鏡による屈折矯正を適切に行う。
- ・ 網膜像の拡大

→読む対象に目を近づける、対象の拡大、弱視レンズ、拡大読書器等の利用



(2)「混濁状態」・・・濁って見える状態

＜見え方＞

- ・ スリ硝子を通して見ているような状態
- ・ 水晶体等の混濁により、光が乱反射する
- ・ まぶしさを感じる場合が多い

＜主な疾患＞

- ・ 白内障、角膜混濁 など

＜見えにくさを改善するための方法＞

- ・ 網膜像の拡大
- ・ まぶしさを感じる場合は白黒反転が有効



(3)「暗幕不良状態」・・・映画を明るい会場で見ているような状態

＜見え方＞

- ・ 晴天の屋外などでまぶしさによる不快感や見えにくさを感じる。

＜主な疾患＞

- ・ 虹彩欠損、白内障 など

＜見えにくさを改善するための方法＞

- ・ 遮光眼鏡やサンバイザー等の活用
- ・ 各々に合った明るさ
- ・ 拡大読書器による白黒反転 など



(4) 「視野の制限」・・・視野の周辺部が見えない状態

＜見え方＞

- ・ 視野の中心部しか見えない→全体像の把握が難しい
- ・ 物を探すことが苦手
- ・ 夜盲がある場合が多く、暗所での歩行が難しい

＜主な疾患＞

- ・ 網膜色素変性症 など

＜見えにくさを改善するための方法＞

- ・ 適切な文字サイズの提供 など



(5) 「視野の制限」・・・視野の中心部が見えない状態

＜見え方＞

- ・ 「見たい物が見えない」→通常は視野の中心部で物を見るが、その部分が見えない状態（暗点といっても、黒点だけでなく、白っぽく抜けている場合もある。）

＜主な疾患＞

- ・ 視神経萎縮、黄斑変性 など

＜見えにくさを改善するための方法＞

- ・ 適切な文字サイズ等の提供 など



(6) その他に

- 「光源不足状態」・・・非常に暗い映画を見ているような状態
- 「振とう」・・・目が意識的に動いてしまい、小刻みに揺れてしまう状態。一生懸命見ようとすると眼振が起こってしまい、読むことに疲労感が伴う場合もある。



5 視覚障害が発達に及ぼす影響

視覚障害が発達に及ぼす影響として、以下のことが挙げられます。

(1) 行動の制限

例) 視覚障害のない乳幼児は、目からの刺激によって外の世界に興味をもち、積極的に探索していきます。目からの情報が入らない、入りにくい視覚障害のある乳幼児は、外の世界に向かって手を伸ばす「リーチング」が、視覚障害のない乳幼児と比べて遅れる傾向があります。

(2) 情報入手の制限

例) 視覚障害のない乳幼児は目から入る情報で様々な概念を形成していきます。しかし視覚障害のある乳幼児は目からの情報が少ないために、誤った、または偏った知識や概念をもつことがあります。そのために視覚障害のある乳幼児には、実物をよく見たり触ったりする機会を設ける必要があります。

(3) 視覚的模倣の困難

例) 視覚障害のない乳幼児は、目からの情報で身のまわりの様々なことを模倣し身に付けていきます。視覚障害があると、目からの情報が正確に入手できないことがあります。そのために視覚障害のある乳幼児には、手を添えたり言葉で補ったりしながら、一つ一つの動きを正確に身に付けていけるようにする必要があります。

養育上の工夫や環境の配慮などによって、これらの影響を最低限に抑え、見えにくさのある子の発達を支援することが重要です。

詳しくは、「見えない、見えにくい子の支援の実際」を参照にしてください。0才からの早期支援や学習を支える教材等を随時掲載してきますので、関心のある方は御覧になっていただければ幸いです。

参考文献

- ・大川原 潔 編著：視力の弱い子どもの理解と支援、教育出版、2000
- ・五十嵐信敬 編著：教師と親のための弱視レンズガイド、コレール社、1996
視覚障害児の発達と指導、コレール社、1998
- ・香川邦生 編著：視覚障害教育に携わる方のために、慶應義塾大学出版社、1996
- ・青柳まゆみ・烏山由子 編著：視覚障害教育入門、ジアース教育出版、2012